

氏名(本籍)	金 采 洙 (韓国)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博甲第205号
学位授与年月日	昭和59年3月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科 文学専攻
学位論文題目	川端康成の文学作品における〈死〉の内在様式についての考察
主査	筑波大学教授 利 沢 幸 雄
副査	筑波大学教授 芳 賀 登
副査	筑波大学教授 文学博士 平 岡 敏 夫
副査	筑波大学教授 柳 沼 重 剛
副査	筑波大学教授 赤 祖 父 哲 二

論 文 の 要 旨

川端康成は幼児期に両親を失い、15歳までには祖母、姉、祖父と、すべての肉親たちと死別してしまう。そうした境遇のせいもあるが、生涯にわたって死に強い関心を持ちつづけた。彼の文学作品では、主要人物たちの死が、構成上重要な役割を果たしている場合が極めて多い。それらの死の持つ意味を考察することは、川端の文学を理解する上で有力な手掛かりとなるはずである。

金氏は文学作品の構造上での三つの要素、ナレーター、ストーリー、プロットを考察上の基軸としながら、川端の作品における死の内在様式を明らかにしようとする。論文の構成は次の通りである(400字詰757枚)。

序章 文学作品におけるナレーター、ストーリー、プロット

第1部 ナレーターにおける〈死〉

第1章 〈外面〉を語ることと〈嘘〉を語ること

第2章 内面語りと〈晒〉の美学

第3章 一人称語りとその題材の特性

第4章 〈語り手〉と〈聞き手〉を係わり合わせるもの

第2部 ストーリーにおける〈死〉

第1章 ストーリーの基本構造とその構成要素

第2章 ストーリーにおける出来事としての死の役割

第3章 ストーリーの原型としての死

第4章 ストーリーの構成要素としての〈出会い〉

第3部 プロットにおける〈死〉

第1章 何がプロットの原型であるか

第2章 プロットに人物を係わり合わせるもの

第3章 プロットの原型となるものとしての解脱思想

第4章 何がプロットに転換点をもたらすか

終章 死生観と表現様式

第1部では語り手の特徴を、川端の全作品に当たって考察し、それが二度大きく変化する事実を証明した上で、作者自身の死生観の変化に基づくと主張している。まず、『浅草紅団』（昭4）までは外面語り（川端自身のことばでは「外部視点」）である。作者の体験に密着した題材でも、語り手は距離をおき絵を眺めるような態度で語るため、その態度は、川端が生を〈嘘〉すなわち虚構と考えようとしていたことに原因がある。

昭和4年頃から内面語り（川端自身のことばでは「制限的視点」）が多くなる。語り手は主人公の内面に入って語っており、その語りを通して人物の心に生の本能と死の本能とが内在する様が写し出される。ここでは死生観や死者、葬式、霊魂、死後の世界など、直接死にかかわる題材が多くなる。

昭和10年以降は、外面語りでありながら、ある場面では人物の内面に入って語る。『雪国』をはじめ彼の代表作の多くが含まれるが、その特徴として象徴性をもった作品だということが指摘できる。しかもその象徴は生の象徴として解読でき、それは語り手が作品を語る過程で、死の観念を超越していくためである。以上が、金氏が川端の作品のナレーターについて行なった考察である。

第2部では作品の内容（ストーリー）分析がなされる。川端の作品では過去の出来事が入り組んだかたちで語られているが、個々の出来事を取り出し、起きた順序に並べかえてみると、共通した特徴が見えてくる。まず、死の出来事が作品のストーリーの骨組になったものが多いこと。その場合、川端が若い時に体験した肉親たちの死と対応関係があるらしいこと。そして初期の作品では、ずっと以前に死んでしまった人が、作中人物たちの出会いの仲立ちをつとめ、それに対して後期の作品では、植物などの自然物が出会いの直接の契機になり、その背後に死者が隠れている。そこでは死者が事件の核になっており、自然物が問題解決のよすがとなることが多い。

第3部では、出来事が語られる順序（プロット）と起きた順序が異なる理由を検討する。たとえば『雪国』では、語り手が島村の意識を通して世界をとらえて語る。それゆえプロットは、島村の意識の変化の過程として展開することになる。その変化の過程は、途中まで蚕の変態過程をかたどっており、それがプロットの原型になっているという。『古都』においても、プロットの構成に、すみれ、杉などの植物が役割を果たし、自然界の推移と人物の心の変化とが対応している。その背後には自然と一体になることによって、死の観念を乗り越えようとする作家の意図が見出せる、として

いる。

結論として金氏は、川端の文学は人間存在の条件である死と深くかかわっていて、死が川端文学の本質を形づくっている一面があるという。虚構である文学が、川端の場合、内容形式ともに彼の死についての考え方と直結していて、作品の中で死を虚構化することで、川端は死の意識を超克しようとした、と。

審 査 の 要 旨

最近欧米で盛んになってきている文学理論を適用した川端康成研究で、日本では極めて新しい意欲的な仕事である。欧米でも、さまざまな立場からの文学理論研究が発表されてはいるが、それを適用した本格的な作品研究は数少ない。しかもそうした研究では、しばしば理論が先行し、作品を歪めて解釈することが起こる。金氏は、川端の全作品を実に丹念に読み込んでおり、豊富な資料をもとに理論を適切に活用している。そのため今まで曖昧なかたちで主張されていたことが構造的に明確にされ、新しい考え方も導き出された。

語り手論的考察としては、内面語り、外面語り、内・外面語りと分類し、その特色を十分に検討した上で研究を進めたため、新感覚派の中での川端の固有の位置や、新心理主義的手法と川端の人生観との密接な関係に、内側から光が当てられることになった。『雪国』や『山の音』のような象徴性をもった作中の象徴性の構造と、「です」態度の作品での聞き手の意味、さらには両者の間の共通性は、語り手論的考察によってはじめて解きあかすことが可能になったと思われる。

ストーリーとプロットを区別し、それぞれの本性を明確にしたのは有効であった。この新しい視点によってはじめて、川端の作品を解体し、ストーリーとして再構成することで、川端の幼少年期の体験と、作品に描かれている出来事との対応関係が明らかにされた。

さらに、語り手は主人公の意識を通して世界を見ているという考えは、プロットの構成を主人公の意識の変化過程とする見方に根拠を与え、その結果、たとえば『雪国』において描かれている出来事を、島村の内心のドラマとして解釈し、終わり近くまでの葉子の転落が、生死にかかわらず島村の心の救済の役割を果たすといったユニークな考えを説得力あるものにしていく。『山の音』の起承転結や『古都』の草と木の季節による変化過程の対比なども、興味深い考察であった。それらの考察をふまえて、従来の川端の「万物一如・輪廻転生思想」に対して、『雪国』『山の音』『千羽鶴』など、川端の代表作のクライマックスをなす部分は、輪廻的存在様式を解体させ、虚無意識から主人公を救い出す「解脱思想」が描かれているのだと主張する。この部分は特に周到な作品分析と綿密な理論の構築とが相俟って見事である。金氏のこの研究は、新しい文学理論の適用が功を奏したこともあって、川端文学の深層に触れることに成功したものとして評価できよう。

あえて問題点をあげれば、もう少し簡潔な表現を用いたほうがよいと思われる箇所がいくつか見られた。理論上の問題では、作者と語り手との関係が必ずしも明確ではなかった。序章では「全能

の作者は忍耐強くわきに控え、かわりに作中人物や読者とあまり変わらない身分のナレーター」が語るとあるが、一方『雪国』の語り手は「島村の生全体が眺められる視点に立って、島村の内面を、註釈的に語り上げる」ともいっている。こちらだとむしろ全能の語り手あるいは作者に近い。もっとほかの作家の作品を合わせて検討しながら、日本の小説における作者と語り手さらには視点人物の関係を検討することが、今後の課題となろう。さらには文学作品が思想・哲学書と構造的にどのように異なるのかといった問題も、今後論究して意義のあることと思われる。

よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。